

「今、私たちは、アメリカの人種問題に立ち向かうことを求められている」

The Washington Post 2020.06.05

“This moment cries out for us to confront race in America

<https://www.washingtonpost.com/opinions/2020/06/04/condoleezza-rice-moment-confront-race-america/>

コンドリーザ・ライス は第 66 代米国国務長官(2005—2009 年、George W. Bush 政権)。現在、スタンフォード大学教授兼同大学フーヴァー研究所上級研究員。9 月 1 日より、同研究所所長。

いかなる言葉をもってしても、ジョージ・フロイドのご家族の苦しみを和らげることはできない。これまでも多くの黒人家族が経験してきたのと同じ恐怖の原因によってフロイドは脚光を浴びている。フロイドの死は、行動を起こすための象徴的な呼びかけとなったが、彼を愛する人々にとって、彼は象徴ではなく、一人の父親であり、兄弟であり、息子であった。

フロイドの死を悼んで、アメリカの人びと、そして、世界中の人びとが、ショックと悲しみ、怒りを経験している。同様の感情はあまりにも何度も繰り返されてきた。過去の経験と同じなら、これらの感情は消え去り、私たちは日常の暮らしに戻るであろう。

しかし、今回は、事情が違っている、と私には思われる。フロイドの死は、ついに私たちにポジティブな行動をとらせるであろう。

フロイドの死は、1955 年にローザ・パークスが、バスの後部座席に移動することを拒んだ瞬間と似ているのではないか。あるいは、1963 年 9 月の、私個人にとって、とくに運命的な出来事、すなわち、バーミングハムの私の家の近くの教会が爆破され、4 人の少女がなくなったときと似ているのではないか。60 年以上が過ぎ、私たちはみんな、ミシシッピの小作人で公民権運動の活動家ファニー・ルー・ヘイマー(【喜多注】 1950、60 年代のミシシッピ州の公民権運動家、黒人人口を減らすという州政策のため、了解なく不妊手術された)の言葉の通り、肌の色の違いを超えて、「うんざりすること」にうんざりしているのではないだろうか。

わが国は平和的な抗議によって前進し、完全されてきた。しかし、都市に火をつけえることはやめなければならない。多くの少数者や移民の経営者など、無辜の人びとの暮らしが煙の中に失われるのを見てきた。略奪や犯罪行為は許されるべきではなく、違反行為は取り締まられるべきである。しかし、鎮静化を求めるだけでは十分ではない。今回は油断をせず、変化を実現させるという決意を持ち続けなければならない。

フロイドの事件を超えて、私たちの組織をより公正なものにするために、制度改革をする必要がある。しかし、世界のあらゆる機構改革は、今回のような問題の一つ一つの原因を取り除くには十分ではない。黒人であるということは、肌の色に対する、暗黙の、あるいは、顕在化した反応を克服することを求められるのである。それは、軽蔑であったり、過小評価であったり、黒人がどのように考えているかについての誤った推定であるかもしれない。場合によっては、恐怖かもしれない。このような反応

をすることを望まない礼儀正しい人々であっても、このような態度を示すことがある。しかし、人と人が人間として、友人として、隣人としてチームメートとして、知り合うときに生まれる尊敬によって、このような感情を克服することは可能であり、多くの場合、克服されている。

それでも、社会は色の見分けがつかないのではなく、これからもそうはならないだろうということを確認しなければならない。私たちが、あたかも色の見分けがつかないかのように、お互いを尊敬の念をもって遇するときに前進が実現する。人種のくびきについて正直にならない限り、それを取り除くことはできないであろう。わが国は生まれたときから欠陥をもっていた。人々はアフリカとヨーロッパから同時にやってきたが、一方は鎖につながれていた。やがて、憲法は奴隷の子孫の基本的な人権を認める強力な道具となった。その過程は、長く困難であったが、違いは明らかで、状況は改善された。

私は、黒人が警官に殺されても、だれも驚かないような、人種差別を規定したジム・クロウ法（【喜多注】1876年から1964<昭和39>年まで存続した、一滴でも黒人の血が混じっている人々を対象とする人種差別的な内容のアメリカ南部諸州の州法の総称）のもとにあるアラバマで育った。黒人が警官に殺されても地方紙の記事にさえならなかった。だから、多くの人が街頭で平和的なデモに参加し、黒人の問題に関心を持ち、うんざりしていることにうんざりしていることを示すのは、私の誇りを喚起する。しかし、抗議行動には限界がある。癒しへの道は、私たちの過去や現在、将来について、予断を排して敬意をもち、正直に、深い対話することからしか始まらない。家庭で、学校で、職場で、祈りの場で、一方的にではなく、みんなで話し合おう。そして、前進するために、お互いの言葉を慎もう。アメリカ国民として連帯すれば、恐怖を信頼や希望、思いやり、行動へと変化させることができる。そうすれば、「より完全な連合」を築くための、共通の責任を受け入れ、果たすことが可能となる。

しかし、我々が個人としての責任を果たそうとするのでない限り、行動への呼びかけは空疎なものとなる。我が国の民主主義を持てるものにも持たざるものにも等しく享受されるように前進させるためには、全員に果たすべき役割がある。

私は、同胞なるアメリカ人をお願いしたい。一人ひとりが何をするのか。個人的には教育の機会の問題に取り組みたい。教育は偏見に対する盾として役立つからである。それは完全な縦ではないが、人々に闘う機会を与える。私は、会話を通して、黒人の子どもの学習格差がなくなるのはなぜか、どうすればそれを克服することができるか、を議論したい。アメリカ人の生活に及ぼす人種の影響について、あなたは、どのような問題意識を持っているのでしょうか？そして、答えを見つけるために何をしようとしているのでしょうか？